紹介

エドガール・フォール著（渡辺恭彦訳）

『チュルゴーの失脚

――一七七六年五月一二日のドラマ――』

本書は、ルイ一六世の下で、財務総監として経済的自由に基づく改革を行ったチュルゴーの失脚とそれをめぐるドラマを描いたEdgar Faure, *12 Mai 1776, La Disgrâce de Turgot* (Paris: Gallimard, 1961) の邦訳である。著者のエドガール・フォールは、法制史を専門とする研究者であるが、第四共和政の首相を務めるなど政治家の顔をもつ。優れた経済学者でもあったチュルゴーが、政策において自らの理論を実践しようとする時、常に問題となったのは世論であった。以下では、本書も重視するこの問題に着目して紹介したい。

第一部「希望」では、一七七四年のルイ一六世の即位と、エギヨン、テレー、モプーによる三頭政治の終焉、そして、彼らに代わりフランスの舵取りを行うことになった財務総監チュルゴーによる経済の全般的な発展を目的とした諸政策が描かれる。また、モプーによって解体されていた高等法院の復活も本書では重要な位置を占める。著者は、常に特権を支持し改革を妨害してきた高等法院が、なぜ世論の支持をえたのかと問う。他に代弁者をもたない世論は、高等法院を代弁者とせざるをえなかった一方、改革の拒否と大衆扇動は高等法院の武器であった。復活した高等法院は、世論を動員し、チュルゴーの政策実現に対して最も大きな障害となった。

第二部「小麦粉戦争」では、チュルゴーの政策の要であった穀物自由化と、それが引き起こした小麦粉戦争について描かれる。チュルゴーは、穀物取引の自由は消費者にとっても生産者にとっても有利なだけでなく、経済の拡大全般にとっても有利だと主張し、穀物自由化の勅令を発令した。また、将来の経済発展のために、一時的な穀物価格の上昇はやむなしとし、貧しい人々に対しては慈善作業場を設置した。しかし、高値を「相場師たる国家」の不正によるものとする考えは根深く、民衆は小麦粉戦争と呼ばれる暴動を起こした。小麦粉戦争にみられる特徴として、民衆自身による公定価格の決定があげられる。著者は民衆の集団的潜在意識に、世論としては表現されえない、君主の至上権に対する差し押さえにも似た何かが見られるとし、革命的観念複合体の誕生をそこに見出している。チュルゴーは、小麦粉戦争を鎮圧することに成功したものの、それは公共の秩序の維持の面での勝利であり、民衆に多くの敵を作る結果となった。

第三部「挫折」では、チュルゴーの改革の総決算である六つの勅令と、その後の失脚が描かれる。チュルゴーは、穀物取引の取締、夫役の廃止、ギルドの廃止などの六つの勅令を、高等法院の抵抗を排して、強制的に登録することに成功した。しかし、これらの政策を実現する前に、チュルゴーは、国王の信任を失い、その二ヶ月後には辞任せざるをえなかった。著者は、国王の変心の大きな原因の一つとして、高等法院の抵抗運動をあげている。国王はもはや彼ら特権者の批判に対して、チュルゴーをかばいきれなくなったのである。

「あとがき」で、著者はフランス革命へと至る流れの中で、改革の失敗が必然的で

あったとする決定論に対して、譲歩によって歴史的宿命を避けることができる人間の可能性を評価しようとする（ここには、首相を務めたフォールの信念を垣間見ることができるだろう）。さらに、著者は、チュルゴーには、暴動や妨害に対して均衡をとる力、つまり、世論の明確な支持をとりつける力が欠けていたと評する。彼らは、常にチュルゴーを支持していたが、自らの意見を表明する手段を全く持っていなかった。したがって、高等法院やギルドなどの組織的な抵抗や、民衆による暴動に対して、チュルゴーは屈することになったのである。

チュルゴーは、フィジオクラートやエコノミストが論じた経済的自由を、財務総監として実現しようとした人物であった。本書は、理論とその実践の困難さを論じることにより、一九六一年という早い段階で公共性やモラル・エコノミーの議論を浮かび上がらせた点で、非常に重要な著作である。また、本書の中心的なテーマである穀物取引の自由化は、ミシェル・フーコーが、自由を前提とする統治技法（「安全」システム）誕生の契機とするなど、その後もさまざまな視点からの研究がなされている。

加えて、本書には詳細な訳注がつけられており、フランス近世史に馴染みのない読者も、比較的読みやすいと考えられる。そして何よりもチュルゴーの起伏に富んだ生涯が読者の関心を引き付けるだろう。チュルゴーの自治体論や、夫役の廃止など具体的な政策については、訳者の渡辺恭彦氏による『一八世紀フランスにおけるアンシアン・レジーム　批判と変革の試み――エコノミストたちの試み』（八朔社、二〇〇六年）の併読をお薦めしたい。

（四六判　上巻六〇〇頁、下巻四九八頁　二〇〇七年九月　法政大学出版局　上巻税別六五〇〇円、下巻税別五五〇〇円）

（谷田利文　京都大学大学院文学研究科修士課程）